

イメージと感覚だけの授業から『考える国語授業』へ

報告者 荒井 賢一

「教えることをおそれてはいけない。教えるべきことをしっかりと教えることを学ばせていただいた。

指導書の通りにワークシートを使ったり板書をして教えていたが、より深く、私自身がその教材に対して、研究できていないことを反省しました。

白石先生のおっしゃられていた様に、具体的な方法、言葉を教え、きまりを教え、使えるようにするために、いろいろ工夫しなければいけないと感じました。」
白石先生の記念講演を聴いた参加者の感想です。

- ① 誰かが文字を丁寧に書く。
 - ② 全ての子がしっかりと声を出す。
- (單元の中で必ず朗読させる。)

③ 聞く。(相手の言ったことを受け入れ
自分の意見を言う。)

ということを大事にしてきたそうです。

「教えるべきことは、きちつと教える」

国語教育が必要と強調されました。

しかし、現状はそうはなっていない。

① イメージと感覚だけの授業

② なぞる確認だけの授業(一問一答)

③ 記憶中心の授業

④ 活動中心の授業

このような授業ではなく、

① 用語 ② 方法 ③ 原理・原則

これらの習得と活用が大切にする
ことが現状の国語を変えると、白石先生は主張されるのでした。

この後、講演の中で、漢字や文学教材・
作文・説明文などをどう教えれば、子ども

たちが考えるようになるのかを具体的に話
していただきました。

例えば、「成 反 灰 皮」の一面目が
どれであるかも、筆順のきまり(原理・
原則)を教えていれば、子どもたちは自
分で正解を導き出せるそうです。

「教えるべきことをきっちり教える」こ
との大切さ方法を学べた講演でした。

実践報告 阿久澤恵子

「じつくり、ゆつくり、丁寧に

積み上げる学習、伸びていく子どもたち」

記念講演の前に、中学で国語を教えられ
ている阿久澤先生の話がありました。

大事なことは「凡事徹底」だと、阿久
澤先生は言い切ります。

「速く短時間で仕上げようとする子は、
学力が伸びません。」

生活態度が一番大切。鉛筆・下敷き・
丁寧な字を徹底指導されるそうです。

「目標はなくていい。目の前にあること
を一生懸命やることで、大きな目標が
達成される。」

という言葉が重く響きました。